【第24回、ＢＰ２周年記念フォーラム】 全体会

子ども虐待予防対策の現状と課題

NPO法人こども福祉研究所　研究員　小出　真由美

福島の子育て環境

これまでKKI では「子育て」や「親支援」をキーワードにフォーラムを行われていましたが、今回のフォーラムでは「子どもの虐待予防に新しい風を」とタイトルにあるように、KKI のフォーラムとしては珍しく「子ども虐待」をキーワードにされていました。

まず、加藤曜子先生から「子どもの虐待予防の対策の現状と課題」の講演がありました。

加藤先生は講演の前に、昨年の東日本大震災の被災地である福島の子育て環境の様子を話して下さいました。放射能汚染された砂場で子どもたちは遊べません。そのために福島市にできた「さんどパーク」という砂場の話がありました。予約制で１時間半の交代制の砂場です。子どもたちの遊び場が限られていること、それでも次世代がその地域で子育てをしていることを忘れてはいけないとメッセージがありました。私は関東に住むので、福島も放射能も他人事ではありません。この震災と被災地があることを忘れませんが、改めてそこに住む次世代のことに関心を持ち続けなければならないと感じました。

親たちへの早期支援の必要性

さて、本題の虐待の現状として、行政の相談統計を元に次のような傾向を説明して下さいました。

・年々、通報件数は増加していること。
・心理的虐待が増加していること。（DV（夫婦間暴力）の目撃が心理的虐待にあたると定義されたことによる増加と考えられる）
・ネグレクトの増加は市町村での統計で増加していること。長期的支援の必要性。
・被虐待児の年齢は小学生以上の学齢期が半数以上を占めること。等

次に、死亡事例からの報告がありました。加藤先生は死亡事例報告の検討委員もされていて、検討する事例の多くは直接虐待者から聞き取りを行えないそうです。なぜなら、被告であることが多いからです。なぜ虐待してしまったのかという真相は、法廷や弁護士、などの聞き取りの中から分析しているそうです。検証できない部分も多いジレンマがあるという現状を知りました。虐待した親から語られた言葉には「子どもに自分の言うことを聞かせようとして」とありました。死亡事例と聞くと、どうしても稀有な事例であり、どこかで変な親だったのではと感じてしまいますが、決して希でないと思いました。そして、小さな虐待の芽が育った果てに死に至ってしまうのだろうと感じました。

あわせて加藤先生が関わられているNPO の活動

の相談統計から次のような傾向を話して下さいました。

・相談者の年齢は出産年齢に比例して30代が増加している。
・20年間で最も多かったのは2002年～2004年ごろがピーク。その後現在は減少傾向。
・一方、相談内容は複雑化・深刻化している。（ステップファミリーや親自身の被虐待体験等）
・小学生を持つ親の相談場所が少ないこと。等

これらを踏まえて、親たちへ早期の支援が必要であったり、通報があった時にはそれが支援の入口になるから、逃げないでもらいたいことを全ての子育て家庭に理解してもらえるような仕組みが必要との話がありました。私も通報を受けたら、訪問する仕事をしているので、この理解が全ての子育て家庭にあったら本当にありがたいと首を縦に振りながら聞いていました。

若者への啓発活動の必要性

さらに、虐待防止の取り組みとして、高校生・大学生などのこれから親になる10代への啓発活動の話がありました。死亡事例で、妊娠年齢が10代の割合は３割であり、ハイリスクとも言える年代への啓発活動は非常に興味深くお話を聞きました。

加藤先生の啓発方法は、調査を行い実態把握をすると同時に、その調査の意義を説明していくというものでした。高校生・大学生では、まだ親に養われている最中、つまり子ども役割をしている年代に、虐待について質問してしまうと、自身が受けていることへの混乱などが起こりうるため、必ずフォローの説明をしているそうです。それでも、ある生徒さんから「私は幸せな家庭に育ったから、こういう虐待があるということを知って悲しくなった」という意見があったそうで、心に負担をかけずに啓発をしていくことの難しさも説明して下さいました。

この調査の中や加藤先生の聞き取りの中で、高

初めて赤ちゃんを育てる母親すべてにＢＰを！

校生・大学生に「０歳児のイメージがない」という話がありました。会場全体、「ん？」とはてなマークをつけて聞いていたと思います。彼らのイメージは「０歳」というくくりで、何か月ぐらいになるまで縦抱きは危ないとか、お座りができるようになるのはいつ頃とかそういう特徴が述べられないのが「イメージがない」という意味でした。

自分が高校生のときにどうだっただろうと考えてみると、きっとわからなかったと思います。関心もなかったと思います。自分が親になることなんて想像さえしていなかったと思います。（いまだ、親になっていませんが）イメージがないどころか大人になることで精一杯だったのではと思います。大学生になれば、社会人になっていつかは親になるだろうと想像していくことになると思うので、そこは調査報告どおり、大学生の方が具体的にどうしたらいいかを考えられるということになるのだと思いました。

未来の親：若者への啓発として、間違った子育て（児童虐待）への理解と、子育ての基本的な理解を深めていくことが両輪として必要とお話がありました。虐待を受けて育った子どもが必ずしも虐待をする親になるとは限らないとはいいますが、それも誰かから正しい子育てを教わらない限り、自身が育てられた子育てを再現していく可能性もあると思います。そのため、この啓発活動は正しい子育てを学ぶ入口としてはとても効果があるのではないかと感じました。

BPプログラムの評価

次に、原田正文先生による緊急提言「子どもの健やかな心の成長をどう保障するか」のお話がありました。今回、BPプログラムの解説用DVD を作成されて、その中にある評価結果を見せて下さいました。BPプログラムは前期と後期に分かれていますが、今回の評価は約９割が前期のプログラム受講者でした。

プログラム作成者が一番気にされた「開催時間と開催回数」は、2 時間の開催時間が「ちょうどよい」と回答された方が93.4% となっていました。そして、４回の回数が「ちょうどよい」と回答された方が68.4% 、少ない？と思いましたが、「４回では少ない」という回答が31.2% となり、もっとずっとこのプログラムに参加していたいという思いを３割の方が感じながら終えられたのだなと感じました。でも、それくらいで終わるプログラムの方が、また会いたいという思いが生まれやすく、この回数がちょうどいいということを逆に裏付けた３割だったのではとも思いました。

「安心と安全が守られていたか」に対する評価は「守られていた」が95.5% と非常に高い評価でした。この数字はとてもすごいと感じました。２年間で26都道県 239プログラム実施されていて、そのほとんどの参加者が「安心と安全が守られていた」と回答するのは、どのBPファシリテーターがプログラムを提供しても、そう感じてもらえたということだと思ったからです。原田先生も「ファシリテーターの人たちはすごいなぁと思う」とおっしゃっていましたが、その意味はここにあると思います。どんなプログラムも完璧であるわけがなく、そのプログラムを実施する結局は「人」がそのプログラムを完成させると思います。BPプログラムとそれを支えるファシリテーターの方々の力が評価された値だと感じました。

子ども虐待予防にBPを

参加者の特徴がよくわかる評価項目が「赤ちゃんのことや育児のことを話し合える友だちはできましたか？」という項目と「BPプログラムを誰かに勧めたいですか？」という項目です。「友だちができた」54.2% 「友だちが少しできた」39.7% とあわせると９割以上なので他の項目と変わりなく高い評価です。また「BPをぜひ勧めたい」79.6%、「BPを勧めてもいい」20.4% とこちらもあわせると100%になる素晴らしい結果です。

ただ私がこれを見ながら、「同年代の感覚」として思ったのは、お母さんたちの迷いだったのです。「友だちと私が思っても相手もそう思ってくれているかしら？」とか「私がいいと思ったBPプログラムをオススメして、「よかった」って思ってもらえるかしら？」という迷いが、「できた」「勧めたい」に100%の評価がつかなかった理由ではないかと感じました。どこかでお母さんたちの自分への自信のなさ（言い換えれば「謙虚さ」）があるともとらえられるのではと考えていました。

一方で、参加者の満足度としては「とても満足した」82.8% 「まぁまぁ満足した」16.8% と、ほぼ全員が満足という結果になりました。ここで、BPプログラムが参加者に必要とされた最高のプログラムかもと思いました。さらに、BPプログラムに参加したお母さんの声に「家で二人きりでいると、どうしたらいいかわからなくなる」とありました。この子育てストレスの元、虐待の芽を根絶できるのは「自分だけじゃない、一人じゃない」と感じてもらえるBPプログラムしかないと感じました。

これらの結果を踏まえて、原田先生からの緊急提言は「子ども虐待予防にBPを」というものでした。「親が親として育つための支援」としてのNPが、すでに虐待予防に大きな効果があることが明らかになっているため、その前段の０歳児の子育てをする親向けのBPプログラムは、虐待予防に直結するからというお話でした。「日本中の初めてお母さんになった人に、このBPプログラムが届くようになること、それが虐待予防になる」と原田先生からのメッセージに、いつか、本当にそうなる日が来ると信じたいと思いました。